

2018年度
年次報告書

一般財団法人日本青年館

I. 公益活動

1. 青年活動振興事業

1) 第67回全国青年大会の開催（11月9日～12日 日本青年館ほか）

全国青年大会は、講和条約発効を記念して1952（昭和27）年に第1回大会が開催され、以来、勤労青年のスポーツ・文化活動の発表と技能向上の場として、全国の青年団が中心となって毎年東京で開催しています。この大会は、一部の種目を除き国民体育大会や国際競技会などに出場した経験のある選手には参加資格がなく、地域で地道にスポーツや文化活動に携わっている青年が参加するものです。地域のスポーツ、文化活動の裾野を広げ、より多くの青年たちに活躍の場を提供するとともに、全国から集まった青年たちの交流と友好を深めることにも重点を置くことにより、平和で文化的な住みよい地域をつくっていくことを目的にしています。

今年度は40都道府県より1,676名（役員104名、体育の部1,440名、芸能文化の部132名）が参加しました。

初日は日本青年館ホールで、瑤子女王殿下はじめ多数のご来賓をお迎えし開会式を行いました。また、元バドミントン選手で北京オリンピック日本代表の小椋久美子さんをお招きした交歓プログラムを開催し、地域で輝くこと、地域活動の大切さをお話いただきました。

剣道競技を一般財団法人全日本剣道連盟と共催した第1回目の大会となった今回は、剣道競技の参加者が男子・女子共に倍増しました。郷土芸能では、在日本朝鮮青年同盟を通じて朝鮮大学校舞踊部と、日中平和友好条約締結40周年を記念して中国太陽芸術団に母国に伝わる舞踊を披露いただいたほか、日本青年館コンコースで行った全国青年物産市まつりでは、各地の物産の出店に加え、都内の青少年団体からの出店もあり10店舗にて開催しました。また、一般社団法人全麵協の協力のもと、そば打ち体験教室を設け賑わいを見せました。

なお、民俗芸能の形を変えることなく若者の力で継承している団体に贈られる後藤文夫賞は、石川県館開青年団の「館開嫁褒め詞」が受賞しました。

今年度の全国青年大会実施種目は以下の通りです。

<体育の部>

バレーボール、バスケットボール、バドミントン、軟式野球、卓球、柔道、剣道、ボウリング、フットサル

<芸能文化の部>

合唱、郷土芸能、写真展、生活文化展、将棋、意見発表、のどじまん、舞台発表

<交流プログラム>

全国青年物産市まつり

2) 第64回全国青年問題研究集会の開催（3月1日～3日 日本青年館）

「青年問題研究集会」（青研集会）は、1950年代に日本青年団協議会が創造した、働く青年の生活課題の解決をめざす学習・実践活動を集約する集会です。1954（昭和29）年に、勤労青年の教育のあり方、考え方として「勤労青年教育基本要綱」を策定した日青協は、青年の自主的学習活動として「共同学習」運動を全国に呼びかけました。共同学習運動は、仲間づくりと話し合い学習を重視し、活動や生活の身近な問題を語り合う中から共通の課題を見出し、共同の力によって課題解決の実践に取り組んでいくという、青年の主体性、自主性による実践的学習運動です。こ

のような共同学習運動の全国的集約と発展的展開をめざす場として、日青協は1955（昭和30）年から「全国青年問題研究集会」（全国青研集会）を開催しています。青研集会は、青年個人や青年組織を巡る問題を、取り組んだ実践活動に基づいてレポート化し、テーマごとに分科会を設定して議論します。今日では地域課題の解決のほか、仕事や家庭、恋愛・結婚等、個々が置かれる生活実態、苦悩や不安等生きづらさや息苦しさを綴るレポートも寄せられ、今日的な青年問題が浮き彫りとなっています。こうした課題に対し、助言者の力も借りつつ参加者全体の集団討議を通じて問題の所在や社会的背景を明らかにし、再び地域で実践することで課題解決に努めることをめざしています。

今年度は、「語ろう、次の一步に向けて」をテーマに開催し、18道県から38名（道府県司会者・オブザーバー含む）が参加しました。実践報告は「山形県」、「石川県・静岡県」、「山口県」から3団体に今年実践した取り組みについて報告いただき、都留文科大学の富永貴公先生がコーディネーターを務めました。山形県南陽市の「おはよさま★」という団体は、青年は高齢者や親世代との接点がないことに気づき、接点づくりとなる「ばっちゃんカフェ」を企画、静岡市青年団連絡協議会と金沢市青年団協議会では両団体が交流事業を通じて行ったヒバクシャ国際署名の取り組みや友好協定を結んだ実践、長門市三隅青年団からは仲間と語り合い、「やさしく、たのしく、おもしろく！」を活動方針として掲げ、様々な事業を行っている実践を発表いただきました。

講演は静岡県立大学の岩崎邦彦教授に「どうすれば、強いブランドが生まれるのか？—個人、組織、地域の個性を生み出すポイント—」というテーマで講演いただき、事業などのスリム化に悩む青年団員を中心とした参加者から好評を博しました。分科会は2部門7分科会で編成し、日青協役員OB・OG、社会教育や心理学などの有識者が助言者を務めました。

3) Rebornこころのふるさとフォーラム2019の開催（3月2日～3日 日本青年館）

農山漁村と都市との連携と共生をめざし、それぞれの立場で地域づくりの現場に携わる人たちが集い、参加者同士をつなぐ新たなネットワークを構築するため、「Rebornこころのふるさとフォーラム2019」を3月2日、3日の2日間にわたって日本青年館で開催しました。この事業は社会教育・青少年教育に携わる市民団体（公益社団法人全日本郷土芸能協会、自治体問題研究所、全国水源の里連絡協議会、特定非営利活動法人地球緑化センター、日本都市青年会議、認定特定非営利活動法人JUON（樹恩）NETWORK）と日青協とで実行委員会を編成し企画運営しました。

参加者数は実行委員を含め18道府県から70名でした。講演いただいた株式会社パシオス上村農園代表の上村光太郎氏からは、新たに地域で農業に従事し、地域の方に支えられ事業を安定化させつつ、地域の方と共に地域課題へ取り組む過程や経緯などをお話いただきました。また6つの分科会では、食、伝統芸能、青年、国際交流、民泊など、それぞれの視点から地域づくりをどのように考えているか、実践を交えて活発な意見交換が行われました。

4) 全国地域青年「実践大賞」

「全国地域青年『実践大賞』」は、全国の優れた青年活動の取り組みに学びあい、それを顕彰するもので、全国の青年団や教育委員会などを通じて応募を呼びかけています。今年度は12道県から地域活動の部21件、教宣活動の部27件（グッズ9件、映像2件、ユニフォーム10件、SNS2件、機関紙4件）合計48件の応募がありました。実践大賞、教宣大賞並びに田澤義鋪賞、全国青年団OB会奨励賞の実践と審査員講評は以下の通りです。

□審査員

萩原 建次郎 氏（駒澤大学 教授）
赤坂 渡 氏（中日新聞東京本社広告局局部長）
三友 千春 氏（元日本青年団協議会副会長）
桐山 理恵 氏（デザイナー）
澁谷 隆（一般財団法人 日本青年館 公益事業部部长）
鳥澤 文彦（日本青年団協議会 事務局長）

<実践大賞>

寄せられた実践の中で最も優れた実践に取り組んだ団体に授与されます。

受賞団体

大分県・豊後大野市青年団なないろベース「豊後大野カルタ」

■実践概要

「ふるさと豊後大野にあるたくさんの宝物を、カルタにして後世に伝えたい、子どもたちと交流したい」という一人の団員の思いから始まった活動で、109音（あ〜りょ）の読み札と絵札を、豊後大野市民から一般公募をし、青年団と市民とが一緒に作り上げました。完成後は、まずは青年団内で遊び交流し、その後は、市役所への寄贈などを考えています。

<教宣大賞>

寄せられた実践の中で最も優れた教宣活動に取り組んだ団体に授与されます。

受賞団体

北海道・第69回全道青年大会実行委員会「第69回全道青年大会ポスター」

■実践概要

全道各地から青年が集まりスポーツ対戦を繰り広げる、第69回全道青年大会兼第67回全国青年大会予選会にて、実行委員としてPRポスターを作成しました。大会実行委員の活動は、3月8日に結成して以降、大会会場の確保・準備・会計・当日の進行から参加者の呼び込みまで全てを受け持ち、6月30日〜7月1日の大会当日を経て、締め作業を行い12月14日に解散しました。その中でこのポスターは、活動期間中の大会PRと参加者呼び込み、テーマの統一、実行委員の意欲向上の役割を果たしました。

<田澤義鋪賞>

田澤義鋪（1885（明治18）年〜1944（昭和19）年。日本青年館第5代理事長）は25歳で静岡県安倍郡長として、青年団にかかわります。その後内務省明治神宮造営局総務課長を務め、明治神宮の造営にあたり青年団の労力奉仕（ボランティア）を建議しました。こうした田澤義鋪氏の実績に基づき、明正選挙運動、地方自治の発展や地域振興活動に取り組み、優れた成果を収めた団体に一般財団法人日本青年館から贈られます。

受賞団体

富山県黒部市・下立青年団「わらじ作り〜伝統行事から生まれた地域の好循環〜」

■実践概要

下立青年団は、地元の伝統行事である獅子舞の踊り手を担っていて、踊りの時に履くわらじはこれまで既製品を使用していましたが、以前は手作りしていたことを知った団員は、自分たちでわらじを作っていくことができないか考え、取り組み始めました。わらじづくりを通して、団員が住む下立地区の物・人・伝承技能が繋がり、地域一体となった持続可能な4世代交流にもなる取り組みです。

<全国青年団OB会奨励賞>

全国の青年団にとって励みとなるような組織強化拡大に顕著な実績を上げた団体に、全国青年団OB会より贈られます。

受賞団体

静岡県・藤枝市青年ネットワーク「宅配サンタ」

■実践概要

運営側がサンタに扮装し藤枝市内の子どもたちに夢を届けることを目的に行っている事業で、親御さんの用意したプレゼントのほか、自分たちで考え手作りしたマラカスとメッセージカードを一緒に渡し、事業当日は、4つのグループに分かれ市内を駆け巡りサンタさんからのメッセージを添えてプレゼントを渡しました。

<後藤文夫賞>

後藤文夫（1884(明治17)年～1980(昭和55)年）は、日本青年館理事長を二度（1930(昭和5)年～1934(昭和9)年、1956(昭和31)年～1969(昭和44)年）にわたり務め、開館当時より民俗芸能の発掘や発展に尽力してきました。その功績を偲び、1991(平成3)年度より「全国青年大会郷土芸能部門」に後藤文夫賞を創設し、民俗芸能の形を変えず若者の力で継承している団体にこの賞が贈られます。

受賞団体

石川県館開青年団 「館開嫁褒め詞」

5) 第49回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会の開催（7月15日～17日・根室市）

日青協は1966(昭和41)年より北方領土返還要求運動に取り組み、1970(昭和45)年より婦人会の全国組織である全国地域婦人団体連絡協議会とともに、北方領土を望む納沙布岬での視察、北方領土問題の学習、元島民の返還への思いを聞くなどの内容で、北方領土復帰促進婦人・青年交流集會を開催してきました。

今年度は、7月15日から17日にかけて、北方領土返還要求運動の発祥の地である北海道根室市において、全国地域婦人団体連絡協議会（全地婦連）と「第49回北方領土復帰促進婦人・青年交流集會」を実施し、主管団体の北海道青協をはじめ全国各地より青年団から27名、全地婦連の参加者を合わせて94名が現地に集いました。

また、近年では2月7日「北方領土の日」にあわせ、内閣府、青年、労働、婦人、地方6団体等、官・民で編成された実行委員会が主催する「北方領土返還要求全国大会」の実行委員長を務めており、今回は福永晃仁・日青協会長が国立劇場で行われた同大会にて挨拶をしました。

6) 国際交流事業

(1) 中華全国青年連合会との交流及び韓国青少年団体協議会の代表団の招聘

日青協は1956（昭和31）年より中華全国青年連合会（全青連）と交流を行っています。また、韓国青少年団体協議会（韓青協）との交流は、2012年に（社）中央青少年団体連絡協議会（中青連）の解散を受け、任意団体としての中青連事務局機能の役割を担う日青協が、中青連事業だった韓青協との交流事業を、2015（平成27）年からは日青協事業としてこれを承継し実施しています。これら交流の実績に基づき、今年度は下記の取り組みを行いました。

①第27次日青協植林訪中団（8月25日～29日／中国北京市 他）

中華全国青年連合会の招聘により、中園副会長を団長、氏家局員を秘書長とする団員11名で構成された日青協第27次植林訪中団を、内モンゴル自治区ダラトキに派遣しました。現地

の高校生ボランティア30名のほか、日本語を専攻する中国人大学生や日本からの留学生8名に加え、今回は日本青年館の訪中団7名と共に300本のポプラを植樹しました。

今年度の参加者は次の通りです。

団 長：中園 謙二（日本青年団協議会副会長）

顧 問：久保田満宏（日本青年団協議会顧問）

顧 問：吉田 恵三（日本青年団協議会顧問）

秘書長：氏家 秀徳（日本青年団協議会事務局）

団 員：片桐 充弘（岐阜県青年団協議会元会長）

団 員：吉野 輝子（石川県青年団協議会直前会長・監事）

団 員：黒住 祐衣（岡山県生涯学習センター 人と科学の未来館サイピア）

団 員：星 恵美子（第1回植林訪中団参加者）

団 員：山田 仁哉（一般財団法人日本青年館業務部）

技術者：林 寿則（公益財団法人地球環境戦略研究機関国際生態学センター
主任研究員）

技術者：小川 俊一（特定非営利活動法人地球緑化センター理事長）

②韓国青少年団体協議会（韓青協）との交流（12月6日～9日・東京都、鳥取県）

キリスト教青少年連合のチョン・ジンヘ理事長を団長とする6名の代表団が来日し、東京都と鳥取県を訪問しました。東京プログラムでは文部科学省や国立青少年教育振興機構を訪れ、情報化による若者への弊害や共働き世帯の子ども支援など両国で同様に抱える問題や、両国が協力して若者の未来につなげる活動に取り組むことを確認しました。鳥取県での意見交換では、鳥取県団と琴浦町青年団の取り組みを紹介し、活発に意見交換が行われました。

団 長：鄭 鎮海（チョン・ジンヘ）（キリスト教青少年連合理事長）

秘書長：李 炯律（イ・ギョンユル）（韓国青少年団体協議会幹事）

団 員：梁 喆勝（ヤン・チョルスン）（韓国青少年団体協議会事務総長）

団 員：陸 惠蘭（ユク・ヒェラン）（韓国ガールスカウト連盟事務総長）

団 員：金 泰完（キム・テワン）（ロータリー青少年連合事務局長）

団 員：黄 敬珠（ファン・ギョンジュ）（韓国青少年連盟事務総長）

7）東日本大震災で被災した仲間の想いを風化させないための取り組み

震災の記憶を風化させないよう地域青年の声を集めた震災パネルの普及をめざし、自治体の地域政策担当者に震災パネルの案内チラシを送付しました。17団体から19件の利用申込がありました。

8）青年団平和集会 in 沖縄の開催（9月15日～16日・沖縄県金武町ほか）

集会開催を知ったオーストラリアの若者も参加し、9県13名が集い学びを深めました。フィールドワークは、嘉手納町連合青年会会長の仲村竜也さんより、基地が生活に与える影響の大きさについて説明いただき、チビチリガマ遺族会会長の與那覇徳雄さんからは、当時の状況だけでなく、青年が戦争の記憶を次代に引き継ぐ大切さを学びました。講演は地元金武町出身で沖縄県団の神田康秀副会長から、基地問題と人々の暮らしの実情について紹介いただいた後、グループ討議で参加者一人ひとりが、今回の学びを積極的に伝えていくことを決意しました。

2. 第67回全国民俗芸能大会（11月24日 日本青年館ホール）

全国各地に伝えられる民俗芸能は、各地の風土と生活の中で生まれ、地域の人々によって歴史的に育まれてきたものです。それらは国民の生活の推移を物語る貴重な民俗文化財でもあります。この大会は、このような各地の貴重な民俗芸能を舞台上で公開し、民俗芸能の重要性を多くの人々に認識してもらおうと開催してきました。

歴史をひもとくと、日本で初めて地域の芸能を舞台上で紹介したのが初代日本青年館のこけら落としとして開催された「郷土舞踊と民謡の会」で、1925(大正14)年のことでした。これまでに440あまりの芸能を紹介してきました。出演者にとっては大会出場が大きな自信につながり、これを契機に芸能の保存の機運も高まるなど大きな成果をあげています。また、早くからこうした芸能の記録保存に取り組んできたのも当大会でした。

今年度の第67回全国民俗芸能大会は、11月24日に日本青年館ホールで開催しました(共催：全国民俗芸能保存振興市町村連盟)。出演芸能は以下の通りです。

- ・煤孫ひな子剣舞(岩手県北上市)
- ・真家のみたま踊(茨城県石岡市)
- ・新湊の獅子舞(富山県射水市)
- ・高鍋神楽(宮崎県児湯郡)

映像も使用し、より詳細な解説も行う研究公演では高鍋神楽に上演いただきました。今大会より当日プログラムを配布し、簡単な解説を掲載したところ参加者からは好評を博しました。来場者数は約750人です。なお、大会の開催にあわせ雑誌「民俗芸能」第98号を発刊しました。

<企画委員会>

- ・山路 興造 民俗芸能学会理事
- ・西角井 正大 前実践女子大学大学院教授
- ・星野 紘 元文化庁伝統文化課主任調査官
- ・齊籐 裕嗣 前文化庁伝統文化財課主任調査官
- ・吉田 純子 文化庁伝統文化課文化財調査官
- ・俵木 悟 成城大学文芸学部准教授
- ・神田 竜浩 国立文楽劇場 文楽劇部企画制作課企画制作係長
- ・久保田 裕道 東京文化財研究所無形民俗文化財研究室長

また、9月30日には文化庁創立50周年記念表彰を授賞しました。これは、文化庁が昭和43年に設立されてから今年で50年になることを記念し、文化の振興に多大な功績のあった団体および個人を表彰するもので永年にわたる当財団の全国民俗芸能大会の開催が評価されました。

3. 月刊誌「社会教育」の発行

月刊誌「社会教育」は、今年度も毎月、計12回発行しました。社会教育を多様な角度から幅広くとらえ、行政、施設職員、さらに様々な現場からの情報が満載されていると各分野の方々から好評を得ています。

7月号では「生涯スポーツと地域づくり ラグビーワールドカップ開催等に向けて」をテーマとした特集、10月号では「若者・青少年」を増大号として特集しました。

9月30日には、地域づくりの総合的な力を育てる学びの場として、特別区社会教育主事会の有志や研究者が実行委員会をつくり社会教育に関する全12回の講座をまとめた、『学びのクリエイターになる!』を書籍として発行し報告会を開催しました。「社会教育」の販売促進と日本青年館の広報

も目的としながら編集部が共催に加わり、30名の参加がありました。参加関係者の所属する社会教育団体からは今後の各種事業や会議において日本青年館を使いたいと具体的な照会がありました。

また、社会教育編集部と関東近郊の社会教育に携わる団体で実行委員会を組織し、前年に引き続き12月7日～8日に「社会教育の未来を♥で語るパート2」と題し、首都圏を中心とした社会教育主事等の行政関係者や文部科学省関係者ほか40名が参加する交流会が開催されました。前仙台市長の奥山恵美子氏と本誌編集長近藤との対談の他、ワークショップを行いました。

さらに、2019年2月には、子どもの貧困や次世代支援をテーマとした「社会教育」で紹介した記事を編集し直し、書籍として『社会的セーフティネットの構築：アメリカ・フランス・イギリス・日本』（放送大学教授岩崎久美子氏 編著）を発行、同年7月に予定されている清溪セミナーの資料としても、活用が予定されています。

<2018年度「社会教育」特集テーマ>

- 2018-04 社会教育主事養成講習改革と新たな「社会教育士」の展開 (862号)
- 2018-05 時代を読む 総合戦略としての地域・学校・子ども・青少年を支える社会教育の展開
～地域課題の解決「学習・活動」の方向性を探る～ (863号)
- 2018-06 学びのキーワード・空間を生かす 学びの「場」をどうつくる? (864号)
- 2018-07 生涯スポーツと地域づくりーラグビーワールドカップ開催等に向けてー (865号)
- 2018-08 放送大学の進化と発展 (866号)
- 2018-09 大学の生涯学習センター～その今日的役割～ (867号)
- 2018-10 若者・青少年 (868号)
- 2018-11 公民館の未来像 学びの循環の起点～地域の社会実験場 (869号)
- 2018-12 特集1 ユニバーサルデザイン時代の障害者の生涯学習
特集2 NPO法施行20年と社会教育 (870号)
- 2019-01 男女共同参画社会基本法20年 (871号)
- 2019-02 生涯大活躍 健康・長寿時代の学びと交流 (872号)
- 2019-03 2018年度の社会教育・生涯学習から2019年度への展望
～開かれ、つながる社会教育へ～ (873号)

※普通号96 p : 税込定価802円 (本体743円)

増大号144 p : 税込定価1,234円 (本体1,143円)

2018年度

| | 4月号 | 5月号 | 6月号 | 7月号 | 8月号 | 9月号 | 10月号 | 11月号 | 12月号 | 1月号 | 2月号 | 3月号 | 合計 |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| A 取次 | 1,420 | 1,417 | 1,416 | 1,428 | 1,420 | 1,438 | 1,416 | 1,413 | 1,411 | 1,412 | 1,407 | 1,404 | 17,002 |
| B 直接 | 363 | 375 | 375 | 417 | 415 | 414 | 413 | 410 | 410 | 410 | 408 | 405 | 4,815 |
| 合計数 | 1,783 | 1,792 | 1,791 | 1,845 | 1,835 | 1,852 | 1,829 | 1,823 | 1,821 | 1,822 | 1,815 | 1,809 | 21,817 |
| 印刷部数 | 2,300 | 2,200 | 2,250 | 2,300 | 2,300 | 2,400 | 2,350 | 2,300 | 2,270 | 2,250 | 2,300 | 2,300 | 27,520 |

4. 青年問題研究所

1) 青年問題研究所の活動

地域の青年集団を再生し担い手を育成することを目的に、青年問題に関する調査・研究活動を行うほか、地域青年活動団体のプラットホームの役割を日本青年館が果たすため、東洋大学の矢口悦子教授をはじめとする専門家との懇談や、新たな地域青年活動の事例調査を行ってきました。

昨年11月には鹿児島県青年会館の青年問題研究所に聞き取りを行ったほか、内閣府主催の「若者オブザイヤー」総理大臣賞を受賞したNPO法人e z o r o c k（エズロック）の視察、さらに全国50か所以上に広がりを見せている「若者会議」を埼玉県寄居町など3か所に聞き取りを行いました。これらを踏まえ、次年度は中心となる研究員5名の他、テーマや地域別の研究員を数名委嘱し、地域社会や青年自身の現状や内包する課題等について研究・協議するほか、実際に地域で活動するNPOや「若者会議」等多様な青年たちが実践交流を図るための「地域青年活動フォーラム(仮称)」を開催するための準備を行っていくことにしています。

2) 財団設立100周年に向けた取り組み

2021年の財団設立100周年を迎えるにあたり、青年問題研究所および図書・資料センターが取り組む事業として、以下の4点について企画検討をすすめています。

- ①70年史以降の歩みを中心とした「財団設立100周年記念誌(仮称)」の発行
- ②実態調査や意識調査等の研究活動による21世紀版「地域青年白書(仮称)」の作成
- ③「戦前の地域青年団報アーカイブ」の公開と活用
- ④「全国青研集会レポート」のデータベース化

①と②については、前述の青年問題研究所活動の一環として東洋大学の矢口悦子教授や北海道大学の辻智子准教授と懇談の場を持ってきました。記念誌については平成3年9月2日に発行された70年史以降の歩みを記録として残すため、年表の精査や資料・データの収集と整理に新年度から取り組んでいくことにしています。また地域青年白書についても上記の研究活動で行う各種調査や研究の成果として対外的に発信できるものを2021年をめざし作成していく予定です。

③については、地域青年団報の劣化を防ぐための整理保存を進めてきました。すでにデジタル画像化した12,858点、200,350ページにおよぶデータを広く活用するため、今後は公開方法や検索システムの検討を進めてまいります。

④については、第1回～63回までの分科会名及びレポート本数の一覧をデータ化しました。63回までのレポート本数は17,365本となりました。あわせて全ての回のレポート集目次ページを画像化しました。また、北海道大学の辻智子准教授を中心とした研究プロジェクトの一環として、日本学術振興会の科学研究費助成事業に申請していただきました。2019年4月1日に公表された審査結果では採択は見送られましたが、膨大な数の全国青研レポートは社会教育をはじめとする様々な分野で大変価値の高いものであり、今後も研究者の協力を得ながら今日的な若者支援や青年教育を考えるための貴重な検討材料としてデータ化に向けた整備を進めていきます。

5. 図書・資料センター

日本で唯一、戦前・戦後期の地域青年団活動資料を多数所蔵する当館の図書・資料センターは、財団設立4年後の1925(大正14)年に建物の竣工とともに付設されました。当時は、数少ない一般公開の図書館として市民にも広く活用されていました。近年は、資料センターとしてとりわけ社会教育関係者、研究者、学生、自治体史編さん関係者、メディア関係者等多くの方々にご利用され、貴重な資料の保存と資料センターとしての役割を担ってきました。

今年度は、新しい青年館に運び込んだ図書・資料を継続的に配架・整理しながら、全体の目録を作成するための作業を進めています。

多仁照廣先生が取り組んでくださった戦前の地域青年団報(12,858点、47都道府県、樺太、朝鮮、満州、台湾を含む)のデジタル画像化は全て終わり、画像データと原本が全て青年館に保管されて

います。原本は大変貴重なもので、国会図書館にもなく、これだけの数があるのは当資料室のみです。今年度は保存されている画像データ（200,350ページ）と原本の照合を行いつつ、国文学資料館の専門家に指導を受けながら中性紙等を使用した原本保存作業を進めました。劣化が激しいものが多く慎重に作業を進め、現在全体の約4割まで保存は終了しています。

また、全国青研集会のレポート集も当資料室にのみある貴重な資料ですが、初期の頃のレポート集の劣化が進んでおり、整理・保存、検索のためのデータベース化などに着手しました。

所蔵する一般図書の目録作成については、戦後を中心とした2,434冊のデータ化が終了しており、継続して戦前を中心とした一般図書のデータ化を進めています。

また4月には、山形県青年団OB会事務局より、山形県青年団関連資料の画像データを寄贈していただきました。県団からのデジタルデータの提供は初めてであり、2月25日に資料の保存状況やデータ化作業の視察を行いました。今後、全国青年団OB会などでも報告するなど、貴重な資料の整理・保存を呼びかけることにしています。

4月～3月末日までの図書資料センターへの問い合わせ、閲覧は以下のとおりです。

[問い合わせ 17件]

- ・地域の市民グループまたは個人による戦前の青年団に関する資料問い合わせ（4）
- ・研究者からの戦前資料の問い合わせ（2）
- ・戦前のホールの催事に関する問い合わせ（3）
- ・戦前女子青年団員の活動に関する問い合わせ（1）
- ・熊谷辰次郎に関する問い合わせ（1）
- ・民俗芸能大会に関して（1）
- ・研究者からの戦前資料の問い合わせ（1）
- ・戦前フィルムの借用について（3）
- ・青年団OBによる問い合わせ（1）

[来館して閲覧 20件]

- ・大学の研究者による日本青年新聞からみる民俗学的調査（9）
- ・大学院生による戦前女子青年団活動について（1）
- ・市民グループによる戦前青年団の活動について（2）
- ・図書館学芸員の田澤義鋪研究のため（2）
- ・日青協結成当時の活動について（1）
- ・大学生卒論準備のための調査（3）
- ・青年団OBの閲覧（2）
- ・浴恩館サポーターおよび下村湖人読書会のメンバー4人見学（1）

6. 文化事業

1) ウィーン・ピアノデュオ・クトロヴァッツ（PDK）の交流公演

全国各地の方々に地元で世界レベルの音楽に触れる機会を提供することを目的に、海外からすぐれたアーティストを招聘し、全国的なコンサートツアーを実施しています。

今年度も世界最高峰のピアノデュオ奏者で、ウィーン国立音楽大学の教授も務めるエドワード&ヨハネス・クトロヴァッツの両名を、9月19日～10月1日（コンサートツアー）の日程で招聘しました。各地での公演は好評を博し、日本青年館主催の銀座ヤマハホールでのコンサートは、333

席がほぼ満席となりました。公演地は下記の通りです。

- | | |
|----------|---|
| 9月21日（金） | 会 場：銀座ヤマハホール（東京都中央区） 主 催：一般財団法人日本青年館 |
| 9月22日（土） | 会 場：町田市民ホール（東京都町田市） 主 催：クトロヴァッツコンサート町田公演実行委員会 |
| 9月28日（金） | 会 場：酒田市希望ホール（山形県酒田市） 主 催：クトロヴァッツ兄弟ピアノデュオコンサート実行委員会 |

7. 高校オーケストラ活動支援事業

日本青年館で第1回目のオーケストラフェスタが開催されたのは1995年1月のことです。日本青年館を活用してのオーケストラ活動を通じた青少年育成の取り組みも25年目を迎えました。「高校の吹奏楽は全国的な発表・交流の場があるが、オーケストラの場合はそうした場がない。ぜひそのような場を」という高校の先生方の声を受けてのスタートでした。以来、ティンパニやコントラバスなどの大型楽器の配備・充実に努めるとともに、1998年には全日本高等学校オーケストラ連盟を組織し、全国的なネットワークづくりにも取り組んできました。現在、連盟には全国106の高校が加盟しています。

今年度は、その連盟と協力して以下の5つの事業に取り組んできました。

1) 第19回全国高等学校オーケストラ・サマースクールの開催

(8月16日～19日、山中湖畔荘清溪)

楽器演奏の基礎的な力を高め、高校生同士の交流をはかり、プロ奏者からの直接指導による技術と音楽性の向上を目標に、全日本高等学校オーケストラ連盟主催、日本青年館後援により開催しました。参加者は全国から27校152名。今年度も昨年同様に個人レッスンの時間をしっかりと確保し、経験に合わせた指導を充実させたことで、参加者のみならず講師からも高い評価を得ています。併せて、今年度は合宿の成果を発表する場として、最終日にオーケストラセミナーの参加者と合同で、富士吉田市ふじさんホールにおいて演奏会を行いました。

2) 第2回全国高等学校サマー・オーケストラセミナーの開催

(8月16日～19日、山中湖畔荘清溪・ふじさんホール)

音楽をつくりあげるための実践的な指導を通じて、より高い技術と音楽性を身に着けることを目的に、全日本高等学校オーケストラ連盟主催、日本青年館後援により開催しました。参加者は25校63名と昨年比で24名増加するなど、学校等への浸透が図られてきました。最終日には合宿の成果として一般公開による演奏会をふじさんホール（約800席）で開催しました。

前述のサマースクールと合わせて富士吉田市教育委員会より後援をいただき、市内の小中学校にチラシを配布していただいたところ、サマースクール・サマーオーケストラ両方の生徒215名に加え、生徒の保護者・近隣住民およそ200名に会場いただきました。

3) 第25回全国高等学校選抜オーケストラフェスタの開催

(12月26日～29日 日本青年館ホール)

(主催：全日本高等学校オーケストラ連盟、一般財団法人日本青年館)

12月26日～29日の4日間、日本青年館において第25回全国高等学校選抜オーケストラフェスタを全日本高等学校オーケストラ連盟と共に開催しました。25回目の節目となる今回は、全国から81校（75演奏団体）、4,310名の中高生が参加。昨年度から9校、約600名増加し、過去25年間で史

上最多の出場校数と参加人数となりました。来賓には藤原誠文部科学事務次官を迎え成功裡に終了しました。

25周年記念企画として、各校から選抜された生徒によって編成される選抜合奏の演奏では、合唱を伴ったベートーヴェンの交響曲第九番（第4楽章）の演奏をしました。合唱団は、応募のあった高校生をはじめ、習志野第九合唱団および国立音楽大学より有志を募り編成しました。また、これまで日本青年館とオーケストラ連盟が行ってきた音楽行事から巣立ったOB・OGを中心に作られた市民オーケストラ「ユージュント・フィルハーモニー」のメンバーら総勢94名によるOB・OGオーケストラの演奏が行われました。選抜生徒による演奏曲目と指揮者は下記の通りです。

<選抜オーケストラ>

演奏曲目 A日程：H. ベルリオーズ作曲／幻想交響曲より第4・5楽章

B日程：L. V. ベートーヴェン作曲／交響曲第9番より第4楽章

指揮者 河地 良智 （洗足学園音楽大学名誉教授 前同大学副学長）

<選抜弦楽アンサンブル>

演奏曲目 W. A. モーツァルト作曲／ディベルティメント第3番 ヘ長調 K. 138

指揮者 大川内 弘 （元日本フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター）

期間中、読売中高生新聞が取材に入り、見開き2ページにわたるフェスタの特集記事が生まれ、読売新聞首都圏版にも記事が掲載され、文化活動や青少年教育において日本青年館とオーケストラ連盟が果たす役割について内外に発信することができました。

4）指揮法初級講座の開催（9月30日・3月10日 日本青年館）

高校生指揮者の技術向上とリーダー育成を目的に、全国高等学校オーケストラ連盟が主催し日本青年館が後援で、指揮法初級講座を2回日本青年館で開催しました。全国から9月は14名、3月は12名の高校生指揮者が参加しました。（指導：河地 良智 ピアノ伴奏：佐藤 全子）

5）全日本高等学校選抜オーケストラ・オーストリア公演2019の開催

（3月25日～3月31日 オーストリア・ウィーン）

（主催：全日本高等学校オーケストラ連盟 後援：一般財団法人日本青年館
旅行取扱：株式会社JTB埼玉支店 国際音楽交流事業）

全国の音楽を愛する中・高校生を対象に募集して選抜オーケストラを結成し、オーストリアでコンサートと交流会を行うことを通じて、一人ひとりの音楽性の向上と国際性を育てることを目的に毎年春休み期間に実施しており今年度で23回目を迎えました。

今回は、中・高校生73名・教員6名（連盟理事）・日本青年館2名・撮影班1名、添乗員3名、指揮者1名の総勢86名にてウィーンを訪問しました。指揮は昨年に引き続き河地良智先生（洗足学園音楽大学名誉教授・前副学長）にお願いしました。

渡航に先立ち2月23日～24日には国立オリンピック記念青少年総合センターで合宿練習を行ったほか、出発直前の3月23日～24日には山中湖畔荘清溪で、国内最後の練習とともに参加者同士の交流を図りました。

今年度は、現地の交流プログラムとして、ウィーン国立音楽高等学校で生徒たちとの演奏交流会のほか、世界一ともいわれるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団等の一流音楽家たちとの昼食交流会も開催しました。また、主たる演奏会をウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地である楽友協会内のブラームス・ザールで行い、満席の中大盛況にて終わることができました。

<コンサート・交流会概要>

①3月26日（火）演奏交流会（会場：ウィーン国立音楽高等学校）

ウィーン国立音楽高等学校の学長挨拶のあと現地学生による演奏（木管五重奏、チェロとピアノの器楽曲）を鑑賞、次に全日本高等学校選抜オーケストラがベートーヴェンのエグモント序曲と浜辺の歌を披露。最後は学生同士でプレゼント交換を行いました。

②3月26日（火）昼食交流会（会場：ラートハウスケラー（市庁舎レストラン））

参加者に事前にメンバーの詳細は伝えず、サプライズ演出で世界トップクラスの音楽家が登場し生演奏を披露しました。モーツァルト／歌劇《フィガロの結婚》序曲、ブラームス／ハンガリー舞曲第5番、J. シュトラウス／トリッチ・トラッチ・ポルカの3曲を演奏していただきました。

[演奏メンバー]

・フルート：マティアス・シュルツ

（ウィーン国立歌劇場管弦楽団奏者、ウィーン・フィルゲスト奏者）

・オーボエ：ヘルベルト・マーデルターナー

（ウィーン国立歌劇場管弦楽団奏者、ウィーン・フィル首席奏者）

・クラリネット：クリストフ・ツィムパー

（ザルツブルグ・モーツァルテウム管弦楽団元首席奏者）

・ファゴット：ヨハネス・カフカ

（ウィーン国立歌劇場管弦楽団奏者、ウィーン・フィルゲスト奏者）

・ホルン：ヨナス・ルードナー

（トーンキュンストラ管弦楽団首席奏者）

③3月29日（木）全日本高等学校選抜オーケストラ・コンサート

（会場：楽友協会ブラームス・ザール）

曲目：L. V. ベートーヴェン／劇音楽《エグモント》序曲 Op. 84、R. シュトラウス／ホルン協奏曲第1番 変ホ長調 Op. 11より第1楽章、L. V. ベートーヴェン／交響曲第7番イ長調 Op. 92、芥川也寸志／弦楽のためのトリプティークより第1楽章、成田為三／浜辺の歌

<参加生徒の学校別人数>（全国29校から73名が参加）

長野(16)、関東学院(7)、船橋(5)、上田(5)、育徳館(3)、品川女子学院(3)、帝塚山(3)

長野西(3)、宇都宮女子(3)、春日部共栄(2)、須坂(3)、千葉女子(2)、大和中(1)

捜真女学校(2)、都立青山(1)、伊勢崎二中(1)、市川学園(1)、浦和明の星(1)、栄進中(1)

大妻多摩(1)、大袋中(1)、京都女子(1)、恵泉女学園(1)、佐久長聖(1)、清泉女子(1)

栃木女子(1)、明大中野(1)、竹園東中(1)、三島(1)

8. 第23回清溪セミナー（7月17日～18日 日本青年館）

地方自治体の若手政治家の研修・交流の場として実施してきた本セミナーは、青年団出身の若手政治家の手によって1997年2月に第1回目が開催されました。

この清溪セミナーには大きな特色が三つあります。一つは、全国から選出された実行委員による自主的な運営であること。二つ目は、参加者の声を活かし時宜を得たテーマを設定し、専門の講師をお招きしていること、そしてその講師の先生方の地方政治家を育てたいという情熱的な姿勢が共感を呼び合っていること。三つ目は、超党派であること、が挙げられます。

開催時期を11月から7月へと移し、「住民主体の地域づくり」をテーマに開催しました。34都府

県から121名が参加し、昨年比で44名の増加となりました。また、参加者同士の議論の場としてグループワークの時間を持ち、法政大学政治学科の学生23名も住民の立場から議論に加わりました。プログラム及び講師は下記の通り。

講義Ⅰ「会津若松市議会の挑戦～政策形成サイクルの確立～」

目黒章三郎 氏（会津若松市議会議長）

講義Ⅱ「住民主体の議会改革とは何か」

廣瀬 克哉 氏（法政大学 常務理事・法学部教授）

グループワーク「議会改革を進めるために～講義Ⅰ・Ⅱをヒントに」

亀井 誠史 氏（市民と議員の条例づくり交流会議）

講義Ⅲ「2019当統一地方選～浮かび上がる政策課題」

福岡 政行 氏（常任講師・東北福祉大学特任教授）

講座Ⅳ「地方財政の現状と課題」

大沢 博 氏（総務省自治財政局財政課長）

講座Ⅴ「真の地方創生と議会の役割」

片山 善博 氏（早稲田大学大学院政治学研究科教授）

また、10月30日～31日に栃木県真岡市において「危機管理」「BCP（事業継続計画。自然災害などへの対応を定めた計画）」をテーマにした行政視察とともに実行委員会を開催しました。

9. 田澤義鋪記念会

田澤義鋪の残した民主的平和的な社会教育上の精神と業績を伝え、これの実現に努めることを目的に、毎年、田澤義鋪記念会を開催しています。

1) 第74回総会の開催（11月1～2日 明治神宮、日本青年館、聖徳記念絵画館）

昨年度に引き続き、初代青年館建設のきっかけとなった明治神宮造営とそれを担当した田澤義鋪に思いをはせながら、田澤義鋪記念会総会を明治神宮「秋の大祭」にあわせて、大九報光会と共に開催しました。総会には全員17名が参加し、昨年度の取り組みなどを報告したほか、名古屋工業大学の上原直人准教授より「田澤義輔の教育思想と実践」と題した講演をいただきました。翌日は全国青年会館協議会理事長会と、聖徳記念絵画館が行っている明治維新150年記念特別展「明治日本が見た世界」を、明治神宮国際神道文化研究所の今泉宜子主任研究員の解説により見学をしました。

2) 田澤会通信第184号の発行

3月26日付で田澤会通信184号を発行しました。田澤会総会の様子や田澤記念館の情報、日青協実践大賞で授与した田澤義鋪賞のほか、浴恩館の今などの記事を掲載しました。

今年度の田澤義鋪賞は、日青協実践大賞に応募された取り組みの中から、富山県黒部市下立（おりたて）青年団の獅子舞の伝承と住民と共に作るわらじづくりの活動に贈られました。審査員からは、「持続可能な地域づくりという課題を、各世代と地元素材を活用して解決するアイデアと展開力」が高く評価されました。

また、事務局で小金井市の浴恩館近隣住民でつくる「下村湖人読書会」を訪ね交流しました。この会は、次郎物語の読書会を継続しているほか、浴恩館公園の環境を守るサポーター活動や、浴恩館の老朽化対策や空林荘（浴恩館敷地内にあった建物で、青年団講習会があったところ下村湖人など講師陣が寝泊まりして青年団の指導にあたりました。平成25年に焼失。現在土台のみが残

っている)の再建を市に要望しています。日本青年館からは日本青年館の歴史を伝えたほか、会のメンバーが青年館を訪問して全国民俗芸能大会の鑑賞や資料室を見学し情報交流を行いました。

10. 国際交流活動

1) 中日青年交流センターとの交流

中日青年交流センターは、1984年、当時の中曽根康弘内閣総理大臣と中国の胡耀邦総書記との共同発意により、日中友好21世紀委員会が、その建設をそれぞれの政府に提唱し、日本政府の無償資金協力と中国政府の資金により1991年共同プロジェクトで建設された施設です。以来、日本青年館は施設の運営等について支援・交流するため、中日青年交流センターから研修生を受け入れるなど施設間の交流を続けてきました。今年度の交流は以下の通りです。

(1) 日本青年館訪中団の派遣 (8月25日～30日 北京、内蒙古自治区、山西省)

中日青年交流センターとの交流事業として山本常務理事を団長に全国青年会館協議会との共催で、標記の日程で訪中団を派遣しました。

今年は国際協力への参加と世界遺産の視察をテーマに、内蒙古自治区と山西省を訪問しました。北京21世紀飯店到着の夜に中日青年交流センターの馬興民主任による歓迎宴を受け、翌日は内蒙古自治区を訪問。日本青年団協議会の植林訪中団と合流し、日中両国の青年・学生とともに沙漠で苗木を植えました。山西省では世界遺産の雲崗石窟や断崖に建立された懸空寺を視察したほか、山西省青年連合会徐殿海主席による歓迎宴を受けました。今回の訪中団の構成は以下の通り。

| | | |
|-----|-------|---------------------|
| 団 長 | 山本 信也 | (一財) 日本青年館常務理事 |
| 秘書長 | 田中 潮 | (一財) 日本青年館公益事業部事業課長 |
| 団 員 | 小松 倫人 | (株) ニッセイ専務取締役 |
| 団 員 | 國廣 京子 | (一財) 北海道青年会館常務理事 |
| 団 員 | 渡辺 政巳 | (一財) 宮城県青年会館常務理事 |
| 団 員 | 前田 昇 | 元鳥取県連合青年団団長 |
| 団 員 | 竹内 立樹 | (株) ニッセイ社員 |

(2) 中日青年交流センター訪日団の受け入れ

2018年度中の訪日団受け入れを調整していましたが、中日青年交流センターの都合もあり、翌年度の早い時期に訪日いただくこととなりました。

11. 関連事業

1) 全国青年会館協議会活動

各県における青年団運動の拠点としての役割を担う青年会館の建設は、昭和25年2月の佐賀県青年会館がスタートでした。その後、各地に青年会館の建設運動が起こり、現在20の都道県に青年会館があります。それらの青年会館同士の連絡協調と青年団体の振興、地域社会の発展を図ることを目的として、全国青年会館協議会が組織され活動しています。

主な活動内容は、財団運営に関わる研修、青年団をはじめとする青少年団体への支援、施設運営のノウハウの相互交換など多岐にわたっています。また、中日青年交流センターとの交流など、国際交流も行い施設の運営等に役立てています。今年度は以下の活動を展開してまいりました。

(1) 総会 (6月5日 日本青年館)

全国青年会館協議会総会を6月5日に日本青年館で開催しました。総会には13館20名の出席があり、昨年度の事業報告・決算及び今年度の事業計画・予算を審議し決定しました。また、各会館の土地の賃貸借状況や、その件に関する行政からの通達により改築を余儀なくされた愛知県青年会館の状況などを共有しました。

(2) 会館職員研修会の開催について (9月25日～26日 栃木県青年会館)

各会館職員のネットワーク構築と、公益事業について学ぶ機会として、会館職員研修会を栃木県青年会館にて開催しました。8会館17名のほか日青協事務局員4名が出席し、会館の運営状況や災害への備えについて情報交換を行ったのち、会館事業をきっかけにNPO法人を設立した、栃木ユースサポーターズネットワークの岩井俊宗氏より、若者の力で地域課題を解決するための活動内容やポイントについて講義いただきました。その後、講義の内容をふまえて、会館が展開する公益事業について意見交換を行いました。

翌日は、現地ガイド随行のもと日光東照宮を視察し解散しました。

(3) 理事長会 (11月1日～2日 明治神宮、聖徳記念絵画館)

11月1日の明治神宮秋の大祭へ参加したのち、神宮会館会議室において全国青年会館協議会理事長会を開催しました。出席は13館13名でした。

今回は、日本青年館ホテルでのインターネットを活用した集客の取り組みについて、御代田予約支配人からの報告を行い、各会館でも取り組むことのできる客室の販売方法について議論しました。翌日には、聖徳記念絵画館で開催中の「明治維新150年記念特別展 明治日本が見た世界」を、特別展を企画した明治神宮国際神道文化研究所の今泉主任研究員より、企画の見どころを紹介いただきながら視察を行い、貴重な機会となりました。

(4) 理事会 (2月5日 日本青年館)

翌年度の総会に上程する2018年度決算見込み、2019年度事業計画と予算について審議するため理事会を開催しました。出席は7館7名。2019年度総会は佐賀県青年会館において2019年6月12日～13日に開催する予定です。

(5) 加盟青年会館一覧 (2019年3月31日現在)

| | | | |
|---------------------|-----------|-----------------|-----------------|
| 一般財団法人北海道青年会館 | 〒060-0806 | 札幌市北区北六条西6-3-1 | TEL011-726-4235 |
| 一般財団法人岩手県青少年会館 | 〒020-0196 | 盛岡市みたけ3-38-20 | TEL019-641-4550 |
| 一般財団法人宮城県青年会館 | 〒983-0836 | 仙台市宮城野区幸町4-5-1 | TEL022-293-4631 |
| 一般財団法人秋田県青年会館 | 〒011-0905 | 秋田市寺内神屋敷3-1 | TEL018-880-2303 |
| 福島県青年会館 | 〒960-8103 | 福島市舟場町3-26 | TEL024-523-1484 |
| 茨城県立青少年会館 | 〒310-0034 | 水戸市緑町1-1-18 | TEL029-226-1388 |
| (公益社団法人茨城県青少年育成協会) | | | |
| 一般財団法人栃木県青年会館 | 〒320-0066 | 宇都宮市駒生1-1-6 | TEL028-624-1417 |
| 群馬県青少年会館 | 〒371-0044 | 前橋市荒牧町2-12 | TEL027-234-1131 |
| (公益財団法人群馬県青少年育成事業団) | | | |
| 一般財団法人福井県青年館 | 〒910-0005 | 福井市大手3-11-17 | TEL0776-22-5625 |
| 一般財団法人静岡県青少年会館 | 〒420-0068 | 静岡市葵区田町1-70-1 | TEL054-255-2566 |
| 一般財団法人愛知県青年会館 | 〒460-0008 | 名古屋市中区栄1-31-30 | |
| (仮事務所) | | パルクス栄大福マンション201 | TEL052-221-6001 |

| | | | |
|------------------|-----------|---------------|-----------------|
| 一般財団法人滋賀県青年会館 | 〒520-0851 | 大津市唐橋町23-3 | TEL077-537-2753 |
| 一般財団法人島根青年館 | 〒690-0033 | 松江市大庭町1751-13 | TEL0852-21-2818 |
| 一般財団法人岡山県青年館 | 〒700-0081 | 岡山市北区津島東1-4-1 | TEL086-254-7722 |
| 一般財団法人防長青年館 | 〒753-0064 | 山口市神田町1-80 | TEL083-923-6088 |
| 特定非営利活動法人高知県青年会館 | 〒781-2122 | 吾川郡いの町天王北1-14 | TEL088-891-5300 |
| 一般財団法人佐賀県青年会館 | 〒849-0923 | 佐賀市日の出1-21-50 | TEL0952-31-2328 |
| 一般財団法人熊本県青年会館 | 〒862-0950 | 熊本市水前寺3-17-15 | TEL096-381-6221 |
| 一般財団法人鹿児島県青年会館 | 〒890-0005 | 鹿児島市下伊敷1-52-3 | TEL099-218-1225 |
| 一般財団法人沖縄県青年会館 | 〒900-0033 | 那覇市久米2-15-23 | TEL098-864-1780 |

〈事務局〉

一般財団法人日本青年館 〒160-0013 新宿区霞ヶ丘町4-1 TEL03-6452-9015

2) 全国青年団OB会 第37回総会福井大会の開催 (10月21日～22日 あわら温泉)

全国25道府県から115名、福井県内から43名総勢158名のOB・OGの参加を得て、全国青年団OB会主催、地元実行委員会主管により開催しました。

開会式においては西川一誠福井県知事の来賓あいさつをいただいたほか、総会後に行われた記念講演では、元福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館の青木豊昭館長より、「越前という国・その歴史的地位」と題し、福井県がこれまで日本の歴史上重要な位置を占めてきた事についての講演をいただきました。また、2日目の昼食会では、東村新一福井市長・吉川雄二教育長もかけつけるなど地元の温かい歓迎でお迎えいただきました。視察観光プログラムでは、えちぜん鉄道を「青年団OB会号」として貸切運行したほか、明治150年企画展を行っている県立博物館などを見学しました。

今後の総会予定は以下の通りです。

①第38回総会・岐阜大会 2019年10月20日～21日 岐阜県下呂温泉

3) 大九報光会 (11月1日 明治神宮)

明治神宮造営に際し、全国の青年団が労力奉仕にあたり、そのことがきっかけとなって日本青年館は誕生しました。その造営の労力奉仕に参加された方々が1950年(昭和25年)11月1日、明治神宮御鎮座30年祭に参加された折、そのことを記念して大九報光会を結成しました。「大九」とは、明治神宮御鎮座の年、大正九年に由来し、さらに耐乏生活に耐え、光明と希望に生きる耐久生活にもかけて命名されたものです。以来、ほぼ毎年11月1日に労力奉仕に参加された方の二世、三世の方々等により明治神宮において総会が開催されています。

今年度も田澤義鋪記念会と合同にて開催し、総会には9名の参加がありました。多世代での参加もあり、世代を超えて造営奉仕の精神が継承されていることがうかがえました。総会終了後は、会館協議会理事長会の参加者及び田澤記念会の参加者とともに、明治神宮・秋の大祭に参列しました。

4) 清溪フォーラム行政懇談会

青年団出身の首長で組織している清溪フォーラムの今年度の行政懇談会は、会員の皆様の都合により、今年度の開催を見送りました。

なお、本年度より新たに富山県黒部市の大野久芳市長が会員として加盟し、会員数は6名となりました。

会員は以下の通り (敬称略)

| | | | | |
|---|---|----|----|-----------|
| 会 | 長 | 伊藤 | 康志 | (宮城県大崎市長) |
| 幹 | 事 | 大西 | 倉雄 | (山口県長門市長) |
| 幹 | 事 | 若生 | 裕俊 | (宮城県富谷市長) |
| | | 金森 | 勝雄 | (富山県舟橋村長) |
| | | 大野 | 久芳 | (富山県黒部市長) |
| 監 | 事 | 保坂 | 武 | (山梨県甲斐市長) |

12. 後援・協力事業

今年度、日本青年館が依頼を受けて後援・協力をした事業は下記のとおりです。

- ① 版画フォーラム2018和紙の里ひがしちちぶ展（第15回展） 6月16日～23日
 〈主催者〉 版画フォーラム実行委員会
 ※後援名義使用、日本青年館賞提供
- ② 第44回太陽美術展 11月17日～11月24日
 〈主催者〉 太陽美術協会
 ※後援名義使用、日本青年館賞提供
- ③ 五泉市市民ミュージカルフェスタ'19 劇団「五線紙」旗揚げ公演「貧乏神と福の神」
 2月17日
 〈主催者〉 劇団「五線紙」
 ※後援名義使用